

語りえぬものを語る言葉 ——メルロ＝ポンティと超越論的言語の問題

佐野泰之¹

はじめに

現象学者は、自分が反省を通して明らかにしたさまざまな事柄について語るが、その際しばしば、自分が語ろうとしている事柄を表現するための言葉の欠如についても語る。たとえば、『内的時間意識の現象学』の中で、フッサールは絶対的主観性としての時間構成の流れを記述しながら「これらすべての事柄のための名前がわれわれには欠けている」²と述べ、ハイデガーは『存在と時間』の中で「[存在者をその存在において捉えるという]この課題にとっては、大抵の場合、言葉が欠けているばかりではなく、とりわけ「文法」が欠けている」³と述べた。しかし、フッサールもハイデガーも、このような表明が彼らの企図を決定的に挫折させるとは考えなかった。彼らは、自分が語ろうとしている事柄を表現するための言葉が欠けていることを認めながら、それにもかかわらず、断固として語るという試みをやめようとはしなかったのである。

このような態度は哲学と言葉の関係についてどのような事柄を示唆しているのだろうか。本発表ではオイゲン・フィンクが提起した「超越論的言語」の問題から出発して、モーリス・メルロ＝ポンティの言語論を読み解くことで、このような問題について考えてみたい。まず、第一節ではフィンクの『第六デカルト的省察』の内容を瞥見し、超越論的言語の問題がどのような問題であるかを確認したうえで、メルロ＝ポンティとフィンクの関係についての基本的な諸事実を確認し、本発表の議論の方向性を明らかにする。第二節では、メルロ＝ポンティがコレージュ・ド・フランス講義「言語の文学的用法の研究」の中で展開しているスタンダー論が超越論的言語の問題と形式的に極めて近い問題を取り上げているという見通しのもとで、スタンダー論の概要を読解する。そのうえで最後に、メルロ＝ポンティのスタンダー論がフィンクの議論と比較してどのような特徴をもっているかを簡単に考察する。

¹ 京都大学大学院人間・環境学研究科特定助教 (E-mail: nyal299@gmail.com)

本発表におけるメルロ＝ポンティの著作からの引用は以下の略号で表記し、スラッシュの前後に原書と邦訳の頁数を記す。文献が複数巻にわたる場合は頁数の前に巻数を記す。外国語文献からの引用はすべて拙訳だが、既訳がある場合は適宜参考にさせていただいた。

PA : *Parcours 1935-1951* (『道程 1935-1951』)

PhP : *Phénoménologie de la perception* (『知覚の現象学』)

RULL : *Recherches sur l'usage littéraire du langage: Cours au Collège de France Notes, 1953* (『言語の文学的用法の研究 コレージュ・ド・フランス講義草稿 1953』)

S : *Signes* (『シーニュ』)

SN : *Sens et non-sens* (『意味と無意味』)

² Husserl (1966), p. 75. [九九頁]

³ Heidegger (1927), p. 39. [第一巻、九五頁]

1. 問題の素描

1. 1. 『第六デカルト的省察』の構想

オイゲン・フィンクの『第六デカルト的省察』（以下『第六省察』）は、一般に「超越論的方法論」の問題を論じた書物とみなされている。超越論的方法論とは、一言でいえば、現象学を営む当の主体そのものを現象学的に反省することにまつわる諸問題を探求する部門であり、それゆえ、同書の中では「現象学の現象学」⁴とも言い換えられている。現象学を営む主体そのものを現象学的に反省するという課題がこのような特別な探求部門を必要とする事情は、フィンクによれば以下のようなものである。現象学的還元によって、現象学者は世界の中の一存在者にすぎない「人間」としての自己の深層に、そのような自己を含む世界の全体を絶えず構成している超越論的主観性を発見する。そして、現象学者のさしあたりの課題は、還元によって発見されたこの「超越論的構成自我」⁵の諸様相を余すところなく開示し、それを現象学的反省の主題として完成させること——この営みを、フィンクは超越論的方法論に対置して「超越論的原理論」と呼ぶ——である。しかし、ここには一つの盲点がある。それは、この営みの只中で、超越論的構成自我から距離を取りつつ、それを反省的に眺めている「超越論的反省自我」⁶あるいは「超越論的傍観者 (der transzendente Zuschauer)」⁷の存在である。現象学的還元の過程に絶えず随行していながらも、それ自体は決して主題化されることのない超越論的生のこの第二の aspek t は果たしてどのように主題化されるのか。これが、超越論的方法論という独自の部門を立てることでフィンクが取り組もうとした課題である。

この問題をめぐるフィンクの議論の細部にここで立ち入ることはできないが、フィンクが目指している（と思われる）結論だけは確かめておこう。『第六省察』の中で、フィンクは「絶対的学問」の理念を打ち立てることによって最終的にこの問題が解決されるだろうという見通しを提示している。現象学者は還元によって超越論的態度へと移行することで、素朴な世界信憑の中に囚われた世間的真理の一面性を自覚し、それを一層包括的な超越論的真理の中へと組み入れる。言い換えれば、世間的真理を「止揚する」。しかし、超越論的態度への移行は、超越論的構成自我と超越論的反省自我の二元性という根源的な緊張を新たに生起させる。しかし、フィンクによれば、この緊張は現象学がいかなる世間的学問からも区別される「絶対的学問」であるという認識に到達することによって解消される。超越論的構成自我と超越論的反省自我という対立する二つの自我は、絶対者の絶対的自己認識の運動の本質的な二つの契機であり、それゆえ、「超越論的原理論と超越論的方法論という反定立的区別は絶対知の究極的综合において消滅し、その限りで超越論的方法論の理念はそれ自体が絶対的学問の概念において何らかの仕方で止揚される」⁸のである。

⁴ e. g. Fink (1988), p. 9. [八頁]

⁵ *Ibid.*, p. 46. [四一頁]

⁶ *Ibid.*

⁷ *Ibid.*, p. 4. [四頁]

⁸ *Ibid.*, p. 169. [一四二頁]

1. 2. 「超越論的言語」の問題

本発表の主題である「超越論的言語」の問題は、このような文脈の中で提起される問題である。その概略は以下のようなものである。現象学が個人的な瞑想ではなく公共的な学問である以上、現象学者は現象学的還元を遂行することで到達した超越論的態度の中で発見した真理を言語によって表現し、他者に伝達しなければならない。しかし、このような企ては現象学者に次の二つの問題を突きつける。

第一の問題は、超越論的態度の中で現象学者が直面するさまざまな事象は、自然的態度の中で妥当している諸概念によっては十全に規定できないにもかかわらず、現象学者はそれらの事象を表現しようとする際に、自然的諸概念を表現するために生み出された自然的言語を用いなければならないという問題である。フィンクが「現代の批判におけるフッサールの現象学的哲学」の中で例として挙げている、人間自我と超越論的自我の「同一性 (Identität)」という話題を手がかりにこの問題の具体的様相を思い描いてみよう。フィンクによれば、人間自我と超越論的自我の同一性は「内世界的 (mundan) な存在者」と「内世界的な存在観念を原理的に超越している」ところの「超越論的な存在者」の間の同一性であり、それゆえ、自然的態度の中で形成された通常の意味での同一性の概念——「内世界的な存在観念の地平のうちで規定可能な同一性の形式」——によっては規定できない。にもかかわらず、現象学者は人間自我と超越論的自我の同一性は通常の意味での同一性とは異なると弁明しながら、それをなおも自然的言語を用いて「同一性」と呼ばざるをえない。たとえこの特殊な同一性を名指すための専門用語を新たに考案したとしても、その意味を説明するために自然的言語を用いざるをえないとすれば、問題は解決されないままだろう。したがって、このような例において現象学者は不可避的な沈黙に直面することになる。

現象学的営為が還元の直後に始まるとすれば、それはこの最初の段階において概念を欠いているだけではなく、原理的に没言語的 (sprachlos) である（「没言語性」とは、単なる叙述手段としての自然的言語によって超越論的認識を語ることはできない、という不能性をも意味する）傍観者は、自らの理論的洞察を述定的に言表するいかなる可能性ももたないのだ⁹。

しかし、仮に現象学者がこの沈黙を乗り越えて超越論的な諸事象を自然的言語によって表現することができたとしても、なお別の問題が待ち構えている。それは、現象学者が超越論的態度のもとで超越論的意味で用いた自然的言語を解釈するのは、現象学的還元をまだ遂行していない、自然的態度のうちにいる他者たちであるという問題である。フィンクの考えでは、現象学者が超越論的意味で用いた言葉を十全に理解するためには、聞き手自身が現象学的還元を遂行して超越論的態度の中に身を置き、その言葉が自然的意味ではなく超越論的意味で用いられていることを了解しなければならない。しかし、現象学者はどうやって聞き手にそのような態度変更を遂行させることができるのだろうか。

1. 3. メルロ＝ポンティとフィンク

⁹ Fink (1988), pp. 104f. [九一頁]、強調は原文。

メルロ＝ポンティは『行動の構造』（一九四二年）や『知覚の現象学』（一九四五年）の中で、当時未公開だった『第六省察』を含むフィンクの諸著作に何度か言及している。この事実はこれまで研究者たちの注意を全く引いてこなかったわけではないが、『第六省察』が一九八八年になってようやく刊行されたという事情もあり、メルロ＝ポンティとフィンクの関係が主題的に論じられ始めたのは九〇年代後半に入ってからのものであった¹⁰。それらの研究の中で、とりわけ大きな議論の的になってきたのは、『知覚の現象学』第三部と『第六省察』の関係である。よく知られているように、『知覚の現象学』は第一部および第二部で経験の「直接的記述」（*PhP*, 424/2.236）としての現象学を遂行したのちに、第三部でそのような記述を遂行する主体そのものについての反省、すなわち「現象学の現象学」（*Ibid.*）を遂行することで第一部および第二部の内容を究極的な了解へともたらすという構成になっている。このように『知覚の現象学』の理論的核心部とも言える第三部が『第六省察』と同じ「現象学の現象学」を標榜しているという事実注目し、両者の間の類似と相違を明らかにしようとする試みがなされてきた。

とはいえ、メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』の中でフィンクの議論を主題的に論じているわけではなく、両者の間の類似として指摘されるものはほとんどが議論の構図上の類似とでも呼ぶべきものにとどまっている¹¹。このことはしかし、メルロ＝ポンティの議論の中でフィンクが果たしている役割の重要性を減じるものではなく、あくまで両者の関係を明確な文献的証拠に基づいて検証することの困難さを示しているにすぎない。それゆえ、本発表でわれわれが試みるのも、メルロ＝ポンティとフィンクの関係を文献学的に跡づけることではなく、メルロ＝ポンティの議論がフィンクの議論への応答という側面をもつということの一つの作業仮説として認めたい。そのような仮説に基づいてメルロ＝ポンティのテキストを読み解くことで、彼の議論に特徴的な着眼点を示すことである。われわれはここでそうした作業に取り組む際にあらかじめ押さえておくべき重要な相違点を二つ挙げておこう。

第一の相違点は、現象学という学問の地位に関わっている。フィンクにとって、現象学という学問は素朴な世界信憑に囚われつつ世界の中で営まれる世間的学問から絶対的に区別されるべきものだった。超越論的方法論をめぐる諸々のアポリアを解決するためにフィンクが遂行する全議論は、素朴な人間自我が位置づけられる「存在（*Sein*）」の領域と超越論的自我が位置づけられる「先存在（*Vor-Sein*）」の領域の峻別、ならびに、一人現象学者だけが後者の領域と関わっているのだという極めて強固な想定によって支えられている。それに対して、『知覚の現象学』序文の有名な末尾における「現象学は、バルザックの作品、プルーストの作品、ヴァレリーの作品、あるいはセザンヌの作品と同じように、骨の折れる作業である […]」（*PhP*, 22/1.25 強調は引用者）という宣言や、同じく序文のうちにある「現象学的世界とは先行する存在の明示化ではなく、存在の創設であり、哲学とは先行する真理の反映ではなく、芸術と同じように真理の実現である」（*PhP*, 21/1.23 強調は引用者）という一節などから窺えるように、メルロ＝ポ

¹⁰ e. g. Kersten (1995); Bruzina (2002); 八幡 (2012); Noble (2014); Smyth (2014).

¹¹ 「[...] 両者は少なくとも主観性の自己到来あるいは自己実現という運動において、同一の構造的機能を果たしている」（八幡 2012, p. 229. 強調は原文）。「前述の議論 [フィンクの議論] は、一見すると『知覚の現象学』のうちに見出される議論と何の類似点ももっていないように見えるかもしれないが、これから見るように、そこにはいくつかの形式的類似性がある」（Smyth 2014, p. xxiv. 強調は引用者）。

ンティにとって現象学の営みは芸術の営みに比されうるものであり、その点で現象学的記述を遂行するのは現象学者に限られない。したがって、メルロ＝ポンティの議論の中に超越論的言語の問題に類比されうる問題が見出されるとしても、それは現象学者に固有の問題ではなく、自らの生き生きとした体験を表現しようと試みるすべての人間にとっての問題であるはずだろう。

第二の相違点は、還元の不可能性の問題に関するものである。フィンクは現象学の歩みを、自然的態度から超越論的態度を経て最終的に絶対者の自己認識へと至る単線的かつ系統的な発展の歩みとして思い描いている。このような想定は、現象学者がこのような発展の全道程を少なくとも原理的には踏破しようということ、言い換えれば、完全な現象学的還元を成し遂げようということをも前提として含んでいる。それに対して、メルロ＝ポンティが思い描く現象学の歩みは循環的なものである。メルロ＝ポンティの考えでは、現象学者は世界を記述するために世界の素朴な定立を停止するが、そのことによって世界から完全に離脱してしまうわけではない。このことは「還元的最も偉大な教訓は完全な還元は不可能だということである」(PhP, 14/1.13) という有名なテーゼによって表明されている通りである。

2. メルロ＝ポンティにおける「超越論的言語」の問題？

すでに述べたように、メルロ＝ポンティが(彼が考える独自の意味での)「現象学」の方法論を構想するにあたって、フィンクの超越論的方法論をめぐる議論から大きな影響を受けていたということはさまざまな状況証拠から推察することができる。しかし、メルロ＝ポンティ自身は超越論的言語の問題を主題的に考察したことはないし、そもそも「超越論的言語」という言葉をほとんど使わない¹²。にもかかわらず、メルロ＝ポンティの議論のうちに超越論的言語の問題に比されうるような問題が見出されるとすれば、それはどのような議論においてであろうか。

われわれの考えでは、そのような問題が見出されるのは、文学をめぐるメルロ＝ポンティの一連の議論である。初期の頃からすでに、文学作品はメルロ＝ポンティの思索の重要な着想源であったが¹³、サルトルが『文学とは何か』(一九四八年)を発表して以降、メルロ＝ポンティは文学さらには言語について自らも主題的な考察を行う必要性を強く感じ始めた。本発表で取り上げるのは、このような背景のもとでメルロ＝ポンティがコレージュ・ド・フランス着任初年度の一九五三年に実施した講義「言語の文学的用法の研究」(以下「文学的用法」)である¹⁴。この講義の後半部で、メルロ＝ポンティはスタンダールの文学実践を沈黙と表現の問題との関係から論じているが、そこでメルロ＝ポンティが注目しているスタンダールの文学的葛藤は、まさしくフィンクが提起した超越論的言語の問題に類比されうるものであるように思われる。そこで、本節では同講義で行われているスタンダール論を、講義の中で暗黙裡に前提とされている議論を踏まえつつ確認したうえで、それがいかなる点で超越論的言語の問題と結びつきうる

¹² 唯一の例外は、『知覚の現象学』第三部第一章「コギト」において、第一部第六章「表現としての身体と言葉」の中で提示した「語る言葉 (parole parlante)」と「語られた言葉 (parole parlée)」の区別を言い換えて、「超越論的ないし本来的な言葉 (la parole transcendante ou authentique)」と「経験的な言葉 (parole empirique)」の区別を語っている箇所である (PhP, 451/2.275)。

¹³

¹⁴ この講義の詳細については、佐野 (2018a); (2018b) を参照。

かを考察していくことにする。

2. 1. 参加と離脱

すでに述べた通り、「文学的用法」講義におけるメルロ＝ポンティの議論は、サルトルの『文学とは何か』の強い影響下でなされたものである。周知のように、同書でサルトルは、作品による読者への働きかけ、すなわち文学的「参加 (engagement)」こそが作家の使命であると主張した。このサルトルの主張に対して、メルロ＝ポンティは「文学的用法」講義の準備ノートやそれ以前に発表したいくつかの小文の中で、「参加」の企てが絶えず「離脱 (dégagement)」という契機を伴っているということを強調することでサルトルの議論を補完しようとしている (e. g. *PA*, 101f.; 122f.; *RULL*, 83; 146)。

ここで「参加」と「離脱」とは一体何を意味しているのか。そもそもサルトル自身の議論の中においてさえ「参加」が具体的にどのような行為を意味しているのかは明確ではないという指摘もあるが¹⁵、『文学とは何か』の中では、少なくともこの概念が言語の使用法の区別に関わっているということは確かである。すなわち、「散文 (prose)」と「詩 (poésie)」の区別である。サルトルによれば、散文が言葉を意味や観念を他者に伝達するための実用的道具として利用するのに対して、詩は言葉を一種の審美的素材すなわち「物」として取り扱う。それゆえ、散文が読者に意味を伝達するのに対して、詩は読者に意味を伝達することはない。詩人とは最初から伝達の失敗を目指すという「負けるが勝ち」¹⁶の勝負に出た人間のことである。ここから、「参加」という使命はもっぱら散文の書き手の使命であるというサルトルの主張が帰結する。参加とは、最も月並みな意味においては、他者に意味を伝達することである。

しかし、メルロ＝ポンティは『文学とは何か』の注に綴られた「最も無味乾燥な散文さえも常に若干の詩を含む」とか「どんなに明晰な散文家であっても自分が言わんとしていることを完全には理解していない」¹⁷といった言葉に注目し、散文と詩を純粹に区別することは不可能であること、それゆえ詩であっても何ごとかを伝達しうるし、散文でもあっても伝達の成功を保証されているわけではないということ強調する。メルロ＝ポンティの考えでは、作家は「作家が語る一切の事柄が、公然とあるいは秘密裡に抱えている主題」としての「世界との作家の接触という経験」を言葉にしようと企てるがゆえに、作家は必然的に、自身が慣習的に用いている言葉を用いて、慣習的意味によっては表現できない事象を表現するという課題に直面する (*PA*, 123)。そのため、作家は自分の表現が理解されず、「孤独 (solitude)」に陥る危険に絶えず晒されている。しかし、作家は必ずしもそのために表現に挫折したり、表現を断念したりするわけではない。「意味する行為」としての芸術は「己を実現するために必要なすでに出来上がった叡智界をもっていない」にもかかわらず、「あらゆる断片から己の伝達手段を創造し、世界の生地そのものの中から意味を生起させる」(*Ibid.*)、すなわち、「離脱」の危険を冒しながら「参加」を成し遂げるのである。しかし、このようなことが一体どうやって可能なのだろうか。

¹⁵ e. g. 澤田 (2002), pp. 161-167.

¹⁶ Sartre (1948), p. 43n.

¹⁷ Sartre (1948), p. 43n.

2. 2. 自尊心と虚栄心

「文学的用法」講義のスタンダール論は、このような問いに一つの回答を与えてくれる。これまで見てきた「参加」と「離脱」の関係をめぐる問題は、同講義のスタンダール論の中ではヴァレリーが一九二七年のスタンダール論の中で提起した「自尊心 (orgueil)」と「虚栄心 (vanité)」の対立の問題へと読み換えて検討されている (RULL, 180ff.)。自尊心とは、他人と共通するところのない自己の特異性を際立たせ保持しようとする性向を、虚栄心とは、他人に理解され他人に気に入られようとする性向をここでは意味する。ヴァレリーの考えでは自尊心と虚栄心を同時に満足させることはできない。というのも、自己における最も特異なものとはまさしくその特異性ゆえに他人には伝達しがたいものであり、それゆえ、他人に理解されるためには自己の特異性を断念し、他人の「同類」として振る舞わなければならないからである。

ヴァレリーはさらに、スタンダールの場合には、ここで言う自尊心が「文化や文明や習俗を敵とする自然な〈自我〉 (Moi-naturel) への信仰」として現れていると指摘する。すなわち、スタンダールにとって自己における最も特異な要素とは、あらゆる「慣習 (convention)」の影響を逃れて自己から直接的に発露する感情や行動のことであり、自己の特異性についてのこうした捉え方が、「自然的 (naturel)」に振る舞うこと、言い換えれば、自己の中に見出されるものを誠実にさらけ出すことに対するスタンダールのこだわりの背景にあるとヴァレリーは考えるのである¹⁸。

しかし、自然であること、自己についてあるがままの真実をさらけ出すことを意図するというスタンダールの企ては、ヴァレリーの見るところ逆説的なものである。なぜなら、そのような企ては、まさしくそれが意図されたものであるという事実そのものによって、自然さのうちに不自然さを、真実のうちに誇張や歪曲を導き入れ、不可避免的に自らを裏切ることになってしまうからだ。自己であろうとすることは、実際には「自己という役割を演じること」であり、そこで演じられた役割としての自己は、もはや自然的な自己とは異なる「考案された人物 (personnage d'invention)」にすぎない¹⁹。このような観点からすれば、自己を誠実に語るというスタンダールの企ては、蠟の翼で太陽を目指すような「喜劇」でしかないということになる。そこからヴァレリーは「文学においては、真実というものは考えられない」²⁰と結論づける。

2. 3. ジレンマの克服

メルロ＝ポンティは講義準備ノートの中で、ヴァレリーのこの議論を踏まえながら、スタンダールが一八〇四年から一八〇六年にかけて「日記」に綴っている女優メラニー・ギルベール (通称ルアゾン) との恋愛のエピソードを分析している (RULL, 169-185)。メルロ＝ポンティの考えでは、このエピソードはヴァレリーのスタンダール批判に再反論する手がかりを与えてくれるものである。

スタンダールはこの恋愛の中で、彼自身が「感覚すること (sentir)」と「知覚すること (percevoir)」と

¹⁸ *Ibid.*, p. 562.

¹⁹ *Ibid.*, p. 566. 強調は原文。

²⁰ *Ibid.*, p. 570. 強調は原文。

呼ぶジレンマに直面している。メラニーと親密な雰囲気になっているときは、彼は感動のあまり麻痺したようになって何の行動も起こせなくなってしまう。反対に、冷静なときは、彼は物語で読んだ魅力的な伊達男として振る舞おうとするあまり過度に演技的な言動しかできなくなってしまう。要するに、彼は情熱的になるあまり動けなくなるか、反省的になるあまり演技的になるかという二者択一の中に閉じ込められてしまうのだ。このような両極端な態度は恋愛の進展を危うくする。二人の仲が深まりつつあったある日、メラニーはスタンダールの言動が「恋い焦がれている男 (un hom[me] pénétré)」のそれではないと非難する²¹。スタンダールの振る舞いは、彼の想いと意図に反して、メラニーを魅了するどころか彼女を尻込みさせてしまうのである。

このジレンマを乗り越えるために、スタンダールは「日記」の中で一つの行動方針を立てている。それは「私が考え感じていることを、彼女の魂を見据えながら、各瞬間に彼女に言うこと」²²というものである。一見すると、これはまさしくヴァレリーの言う誠実さの「喜劇」の中に身を投じる企てであるように見える。しかし、メルロ＝ポンティはこの行動方針の中に、ヴァレリーの批判を乗り越えるようないくつかの洞察を見て取っている。

第一に、「日記」におけるスタンダールの考察を読むと、スタンダールは率直な語りを意志によってではなく、知性による制御や把握を超えた「自発性」の作用の助けを借りて成し遂げようとしていることがわかる。「私が気づいたのは、うまくやるためにはあらゆる点で少々無神経になる (se blaser) 必要があるということだ」²³。スタンダールはもはや、「策略 (manœuvre)」によってすべてを知的に制御しようとはしない。その代わりに、事物や他者たちの予測不可能な反応に「即興 (improvisation)」によって対応する能力を身につけようとするのである。このような観点に立つと、「スタンダールの自然的なものとは、あらかじめ規定されている自然ではない」(RULL, 182)、つまり、スタンダールが企てているのは、ありのままの自分という疑わしい構成物に回帰することではなく、新たな状況に適応した新たな自分を創造することである。自然になろうとすることは、すでに存在する自然さに回帰することではなく、新たな自然さを創造することである。問題をこのように捉え直せば、ヴァレリーの言う誠実さのジレンマはもはやジレンマではなくなるだろう。なぜなら、自己についての真実とは、それを示そうとする意志によって破壊されてしまうような前もって存在する真実ではなく、行為を通して新たに創造される真実だということになるからである。

第二に、新たな自己を創造するというスタンダールの企ては、ヴァレリーが指摘したもう一つのジレンマ、すなわち自尊心と虚栄心のジレンマをも乗り越えようとする企てである。なぜなら、スタンダールにとっての問題は、ヴァレリーが思い描いたような、自分を貫いて他人を捨てるか他人に合わせて自分を捨てるかという二者択一ではなく、「自己と他人を再創造する」(RULL, 187) こと、つまり、新たな自分を創造することによって、他者たちをそのような自分にふさわしい存在へと変えてしまうことだからである。

²¹ Stendhal (1981), p. 274.

²² *Ibid.*, pp. 263f. 強調は原文。

²³ *Ibid.*, p. 263. 強調は引用者。

2. 4. 間接的言語の習得

この自己と他人の再創造という企てにおいて決定的な役割を果たすのが、語るという行為、それも自分を率直に語るという行為である。スタンダールは結局、恋愛においてはこの企てに成功しなかったのだが、メルロ＝ポンティは、スタンダールがメラニーとの恋愛の中で辿り着いた行動方針が、のちに文学に適用されて彼の文学的成功を導いたと主張する。すなわち、スタンダールは文学において、自分に固有の経験を他者たちに伝達しようとするような独自の表現技法を発明し、自分で自分の読者を創り出すことに成功したのだと主張する。

スタンダールが発明した表現技法を、メルロ＝ポンティは講義準備ノートの中で「間接的言語 (langage indirect)」あるいは「半沈黙 (demi-silence)」と呼んでいる (RULL, 192)。スタンダールが文学において直面していた課題とは、自らの生き生きとした体験を言葉によって記述し、他者に伝達することの困難さだった。自分が没頭している体験を言葉にしようとすることは、その体験から距離を置き、その体験を反省的に眺めるという契機を含んでいる。それゆえ、体験を記述する試みは、必然的に体験の鮮烈さを損ない、台無しにしてしまうようにスタンダールには思われたのである。そこで彼は、こうした体験をほのめかしや隣接する細部の描写によって「取り囲む」という仕方で語ることで伝達可能な表現たらしめようとする。これがメルロ＝ポンティが「間接的言語」と呼ぶ表現技法である。

メルロ＝ポンティは、この「間接的言語」の発明をスタンダールの文学的成功の中心的要因とみなしたうえで、スタンダールがこのような表現技法に到達することができた要因として——はっきりとはではないが——少なくとも二つの要因に触れている。

第一の要因は、スタンダールが「日記」の執筆などを通して持続的に書くことの修練を積んでいたという事実である。メルロ＝ポンティは、スタンダールが初期の小説『アルマンス』において、主人公オクターヴの性的不能を終始ほのめかしによってしか表現しようとしなかったために読者の理解を得られなかったというエピソードに触れ、スタンダールが間接的言語を徐々にしか獲得しえなかったことを強調している (RULL, 180)。このように、間接的言語は決して人が小手先で行使しようとするようなテクニックなどではなく、言語の長い修練を通して獲得された「巧みさ (dextérité)」 (RULL, 214; 215) を支えとして初めて行使されうるものなのである。

第二の要因は、スタンダールにおける自己愛の変容である。間接的言語とは、真実を語るために「了解されず、読者に届かない危険」 (RULL, 207) を冒すような言語であるが、そのような言語を断固として行使するためには、人は自己を承認してもらうためではなく真理を表現するために言語を行使しなければならない。それゆえ、間接的言語とは、表現技法であると同時に表現態度でもある。そのような態度への移行は「もはや自分を愛することではないようなことを受け入れる」 (RULL, 175) ことを含んでいる。このことをメルロ＝ポンティは、自分は一〇〇年後の読者に読まれるだろうというスタンダールの有名な予言にうちに見取っている。サルトルは『文学とは何か』の中で、スタンダールのこの予言を「芸術家

の孤独」に対する「埋め合わせ神話 (mythe compensateur)」の一種とみなした²⁴。メルロ＝ポンティは「間接的言語と沈黙の声」の中で、サルトルのこの議論をおそらくは念頭に置きながら、スタンダールの同じ予言を「歴史の裁きへの呼びかけ (appel au jugement de l'histoire)」として解釈し、スタンダールがここで読者からの承認を期待してはいるが、そのような承認をもはや現世では求めないという両義的な態度をとっているという点に積極的意義を見出そうとしている (S, 119f./1.112f.)²⁵。自己への献身から真理への献身へのこの微妙な変化こそが、「物そのものについて語るのを諦める」ことで「断固として語る」(S, 71/1.66) という逆説的な企てを可能にするのである。

おわりに

以上すべての事柄を、メルロ＝ポンティは文学に固有の問題として論じていたわけではおそらくないだろう。すでに『知覚の現象学』の中で、メルロ＝ポンティは新たな意味を創設する創造的言語活動である「語る言葉」を「伝統以前の原初的経験を目覚めさせる作家や哲学者の言葉」(PhP, 218/1.295) と呼んでいたし、同年の論考「小説と形而上学」の中では「問題は、世界の経験をして語らしめ、意識がいかにして世界の中から逃れ出るかを示すことなのだから、そのとき人はもはや表現の完全な明晰さに到達できるなどとうぬぼれることはできない。もし世界が、「物語 (histoire)」の中で、指でさし示すようにしてしか表現できないような類のものであるとすれば、哲学的表現も文学と同じ両義性を引き受けることになる」(SN, 36f./40) と述べていた。メルロ＝ポンティにとって、哲学と文学は「世界についての一切の思考に先行する世界との接触」(Ibid.) を記述しようとする限りにおいて同一の試みなのである。

メルロ＝ポンティにおいて文学的言語の分析がこのような背景の上に位置づけられるとすれば、「文学的用法」講義のスタンダール論を一つの哲学方法論の企てとして解釈することが許されよう。このように考えたとき、メルロ＝ポンティがスタンダールの文学実践の分析を通して取り出した「間接的言語」という概念は、フィンクが提起した超越論的言語の問題に対して可能な一つの解決の方向性を示すとともに、興味深い問いを提起するように思われる。

フィンクにおいてもスタンダールにおいても、語り手が表現しなければならないのは、慣習的な言葉によっては表現することができず、さしあたり語り手当人しか接近することができないような体験の真理である。この表現の難問に対してスタンダールが採用した解決は、そのような真理を直接記述するのではなく間接的に記述するというものだった。メルロ＝ポンティの考えでは、スタンダールのこの決断は単なる表現技巧の問題だけではなく、実存的な、あるいはこう言ってよければ道徳的な態度の問題でもあった。間接的言語によって真理を語るために、スタンダールは自分がこの世では読まれないであろうという予測を受け入れなければならなかった。彼は自らの行為の準則の中心を、自己ではなく真理のうちに置いたのである。この態度は、他者に承認されることばかりをひたすら希求する態度とは一線を画しているが、しかしそれは、自分が語っているものは真理なのだから他者の承認など一切得られなく

²⁴ Sartre (1948), p. 132. [一二四頁]

²⁵ この「呼びかけ」をめぐるサルトルとメルロ＝ポンティの相違の詳細は、赤阪 (2015) を参照。

でも構わない、といった自己閉塞的な態度とも異なっている。スタンダールは自分がこの世で読まれないことは受け入れるが、しかし読まれることは望む。しかも、神のような超越的存在でも、数千年先の人類のような不確かな存在でもなく、一〇〇年後の読者という、彼が生き生きとその相貌を思い描くことのできる他者たち——「私が愛する人々、ロラン夫人、メラニー・ギルベール……のような人々」²⁶——に読まれることを望むのである。

メルロ＝ポンティはコレージュ・ド・フランス就任講演「哲学をたたえて」の中で、哲学者は真理・自己・他者という三つの契機をともに成立させようと努力する、といった旨のことを述べている。スタンダールは哲学者ではないが、メルロ＝ポンティがスタンダールを論じるときに注目するのも同じ三つの契機である。スタンダールは、自分が愛する人々に似た未来の他者たちのために、自分が真実だと信じる事柄を率直に語ることで、自己を「作家」として実現した。いかにして言葉を用いるかという問題が、メルロ＝ポンティにおいては自己・真理・他者という三つの契機とどのように向き合うかという問題と密接に結びついている。こうしたメルロ＝ポンティの議論を前にして、今日、哲学をするわれわれはどのように言語を行使すべきか……このような問いを提起して論を終えることにしたい。

文献表（メルロ＝ポンティの文献）

Phénoménologie de la perception, Gallimard, coll. « Tel », 1976[1945]. [竹内芳郎／小木貞孝（訳），『知覚の現象学1』，みすず書房，1967年／竹内芳郎／木田元／宮本忠雄（訳），『知覚の現象学2』，みすず書房，1974年]

Sens et non-sens, Gallimard, coll. « Bibliothèque de Philosophie », 1996[1948]. [滝浦静雄／木田元／栗津則雄／海老坂武（訳），『意味と無意味』，みすず書房，1983年]

Signes, Gallimard, coll. « Folio essais », 2001[1960]. [竹内芳郎（監訳），『シーニュ1』，みすず書房，1969年／竹内芳郎（監訳），『シーニュ2』，みすず書房，1970年]

Résumés de cours: Collège de France 1952-1960, Gallimard, coll. « Blanche », 1968. [滝浦静雄／木田元（訳），『言語と自然』，みすず書房，1979年]

La prose du monde, Gallimard, coll. « Tel », 1992[1969]. [滝浦静雄／木田元（訳），『世界の散文』，みすず書房，1979年]

Parcours 1935-1951, Verdier, 1997.

Recherches sur l'usage littéraire du langage: Cours au Collège de France Notes, 1953, Texte établi par Benedetta Zaccarello et Emmanuel de Saint Aubert. MetisPresses, 2013.

文献表（その他の文献）

Bruzina, R. (2002), "Eugen Fink and Maurice-Merleau-Ponty: The Philosophical Lineage in Phenomenology", in T.

²⁶ Stendhal (1982), p. 536.

- Toadvine and L. Embree (eds.), *Merleau-Ponty's Reading of Husserl*, Kluwer, pp. 173-200.
- Fink, E. (1966), *Studien zur phänomenologie 1930-1939*, Martinus Nijhoff.
- (1988), *VI. Cartesianische Meditation, Teil I. Die Idee einer transzendentalen Methodenlehre. Text aus dem Nachlass Eugen Finks (1932) mit Anmerkungen und Beilagen aus dem Nachlass Edmund Husserls (1933/34)*, Hrsg. v. Hans Ebeling, Jann Holl und Guy van Kerckhoven, Kluwer. [エトムント・フッサール / オイゲン・フィンク 著、新田義弘 / 千田義光 (訳), 『超越論的方法論の理念 第六デカルト的省察』, 岩波書店, 一九九五年]
- Heidegger, M. (1927), *Sein und Zeit*. Max Niemeyer, 2006. [原祐 / 渡邊二郎 (訳), 『存在と時間』, 中央公論新社, 二〇〇三年, 全三巻]
- Husserl, E. (1966), *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins (1893-1917)*, Hrsg. Rudolf Boehm. Husserliana Band X, Martinus Nijhoff. [立松弘孝 (訳), 『内的時間意識の現象学』, みすず書房, 一九六七年]
- Kersten, F. (1995), “Notes from Underground: Merleau-Ponty and Husserl's *Sixth Cartesian Meditation*,” in S. G. Crowell (ed.), *The Prism of the Self: Essays in Honor of Maurice Natanson*. Kluwer, pp. 43-58.
- Noble, S. A. (2014), *Silence et langage : Gènes de la phénoménologie de Merleau-Ponty au seuil de l'ontologie*, Brill.
- Saint Aubert, E. de (2004), *Du liens des êtres au éléments de l'être : Merleau-Ponty au tournant des années 1945-1951*, Vrin.
- (2005), *Le scénario cartésien : recherches sur la formation et la cohérence de l'intention philosophique de Merleau-Ponty*, Vrin.
- Sartre, J. P. (1948), *Qu'est-ce que la littérature ?* Gallimard, coll. « Folio », 2008. [加藤周一 / 白井健三郎 / 海老坂武 (訳), 『文学とは何か [改訳新装版]』, 人文書院, 一九九八年]
- Smyth, B. A. (2014), *Merleau-Ponty's Existential Phenomenology and the Realization of Philosophy*, Bloomsbury Academic.
- Stendhal. (1981), *Œuvres intimes*, t. I, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade ».
- . (1982), *Œuvres intimes*, t. II, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade ».
- 赤阪辰太郎 (2015) 「サルトルを読むメルロ＝ポンティ——『文学とは何か』をめぐる」, 『メルロ＝ポンティ研究』, 第19号, 45-57頁.
- 佐野泰之 (2018a) 『『言語の文学的用法の研究』——書くことと生きること』, 松葉祥一 / 本郷均 / 廣瀬浩司 (編), 『メルロ＝ポンティ読本』, 法政大学出版局, 二〇一八年, 二五六 - 二六六頁.
- (2018b) 「身体黒魔術、言語白魔術——メルロ＝ポンティ「言語の文学的用法の研究」講義におけるヴァレリー読解をめぐる」, 『立命館大学人文科学研究紀要』, 第一一四号, 三 - 三二頁.
- 八幡恵一 (2012) 「メルロ＝ポンティとフィンク——「現象学の現象学」をめぐる」, 『年報地域文化研究』, 第一六巻, 二一八 - 二三九頁.